

# 乳児保育における保育学生の自尊感情を高める学習プログラムの提案と評価

山 口 香 織

## A Proposal and Evaluation of an Learning Program to Encourage of Students to Grow Self-Esteem in Infant Care Teaching

Kaori YAMAGUCHI

### 要 旨

本研究では、保育学生の自尊感情を高める学習プログラムとして、乳児保育の授業において助産師による「いのちの教育」を実施し、その効果を検討した。授業の前後で自尊感情尺度を測定した結果、プログラム実施後の方が、保育学生の自尊感情の得点が有意に高くなっていることが明らかになった。また、本プログラムによる学生の気づきについて、特別講義のリフレクションシートをテキストマイニングの手法で分析した結果、6つのカテゴリーが生成された。それらを学びの視点で再分類すると、①自分の価値や「いのち」を大切に想う感覚の醸成、②妊娠・出産・育児とメンタルヘルスに対する理解、③親や周りの人への感謝、④保育者としての使命感に分けることができた。以上のことから、本プログラムを取り入れた乳児保育の授業が、保育学生の自尊感情を高める内容となっていることが示唆された。

キーワード：保育者養成、乳児保育、自尊感情、学習プログラム、テキストマイニング

### 1. 問題と目的

平成29（2017）年に新しい保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領が改訂（定）され、その中で「乳児保育（ここでは3歳未満児保育とする）に関する記載の充実」が示された。これは、社会的・教育的な点から乳児保育の重要性が示唆されたことを意味している。一方、乳児保育は、人格形成の基礎を培うためには非常に重要であるとされながらも、保育施設の量的拡充を優先するがあまり、保育の質が確保されていない現状がある。保育所等の保育施設においては質の高い保育のありようが検討されており、実際に子どもとかかわる保育者の専門性の向上も急務の課題となっている。このことを受け、当然のことながら保育者養成校としても保育の現場で求められる資質・能力の育成を目指して、各校が独自のプログラムを考え、学生にどんな力をどのような内容でどうやって身につけるかの授業改善が行われている。

乳児保育担当の保育者に求められる資質・能力については、前報で報告している（山口，2019）。例えば発達理解である。乳児期は発達が著しく、心身ともに個人差が特に大きい。そのため、同じ月齢や年齢の子どもの平均的・標準的な姿に合わせた保育をするのではなく、一人ひとりの発達過程を踏まえた上で、どのような経験が必要かなどを長期的に見通して、保育を展開する必要がある。

また、近年は保護者支援の重要性も高まっている。特に初めて子育てを経験する母親は育児への不安度が高く、育児ノイローゼになりやすい傾向にある。母親にとって最も身近な専門職である保育者には、子育て支援において重要な役割を担うことが期待されている。保育者は、個々の保護者の背景にある複雑な家庭環境および心理状態を念頭に置き、保護者の気持ちを真摯に受け止めながら、保育者としての専門性

を生かして日々の保育の中で保護者支援を行わなければならない。

そして、子どもの安定したアタッチメントの形成を促す保育者の受容的・応答的なかわりである。アタッチメントとは、子どもが特定の大人との間に築く情緒的な絆のことを指す。近年、非認知的能力という言葉を目にするが、この「非認知」的な心の発達を支えるのは、養育者と子どもとの間に形成される安定したアタッチメントであることが報告されている（遠藤，2018）。これは、保育所保育指針（2017）でも乳児期の子どもの発達には「アタッチメントの形成」が大切と示されており、乳児保育をする上で最も重要なポイントといえる。

では、乳幼児期に安定したアタッチメントを経験することが、子どもの生涯にどのような影響を及ぼすのだろうか。

一つ目は、“自他に対する基本的信頼感の形成”である。子どもは乳幼児期に、アタッチメントを通して、自分あるいは他者はどのような存在であるか、他者は自分のことを受け入れ護ってくれる存在なのか、自分は困った時に求めれば助けてもらえる存在なのかといったことに関する主観的な確信、いわゆる「内的作業モデル」を自分の心の中に形成する。それは、養育者にしてもらったことを別のひととの関係でもしてもらえるはずだという確信と期待をもって自分の振る舞いを予測することへと繋がっていく。つまり、主な養育者との間で経験した関係の取り方と類似した性質の対人関係をもつようになるのである。そのため、乳幼児期に安定したアタッチメントを経験できた子どもほど、困った時に多様な他者に対して素直にシグナルを発し、現実には他者から助けてもらえることができるのである。

二つ目は、“共感や心の理解能力の形成”である。子どもが恐れや不安などの感情を持って近づいてきたときに、親や保育者をはじめとする大人は、その崩れた感情をただ立て直すだけでなく、感情的に寄り添い、「痛かったね」など子どもの心の状態に合致した言葉がけをする。これは、自分自身が「社会的な鏡」となって子どもの心の状態を映し出す役割を果たしている。養育者などによるこうした子どもの感情への同調や映し出しは、子どもの共感性や思いやり、そして自他の心を的確に理解する力の発達に寄与していることが近年の研究から明らかになっている（遠藤，2018）。

三つ目は、“自尊感情の基礎の形成”である。近藤（2010）は、その著書の中で「基本的自尊感情は、極めて幼い頃の親あるいは親に代わる養育者との関係で成立する愛情関係を支えとし、さらに、そうした経験を積んだ後で、あるいは積みながら、身近な信頼できる人々との共有体験を重ねていくことで、より強固に形成されていく」と述べている。また、Verschuere & Marcoen（1999）も安定したアタッチメントを持つ子どもの方が、自尊心を高く持っており、肯定的な自己イメージを持っていると報告している。しかし、養育者との安定したアタッチメントだけでは、自尊感情は高まらない。園田（2007）は、自尊感情を育てる際に「かかわる大人自身にまずは自尊感情が内在していることが必要条件となる」としている。このことから、乳幼児の自尊感情を育てていくためには、それにかかわる周囲の大人が自尊感情をもつことが必要と言える。

そこで、この養育者側の自尊感情に着目し、保育者養成においても、学生の自尊感情を高めることが重要であると考えた。

乳児保育を担当する保育者にとって、自分自身の自尊感情を高め、自分を大切にする意識を育むことが大切である。また、保育士は子どもの“いのち”を預かる立場にあるため“いのち”について学ぶことも必要である。これらを踏まえ、本研究では、保育学生の自尊感情を高める学習プログラムとして「いのちの授業」を提案し、評価することを目的とする。具体的には、乳児保育の授業において、助産師による「いのちの授業」を行い、講義前後の学生の自尊感情を測定することでその効果を明らかにする。また、本プログラムの学びについては、特別講義後の感想として提出された自由記述形式の回答を質的に分析すること

で、今後の授業改善に有用な資料を得ることを目的とする。質的分析には、テキストマイニングの手法を用い、頻出語の抽出と抽出語の関係性の分析から、学生が本プログラムによってどのような気づきが促されたのかを検討する。

## 2. 研究方法

### 2.1. 分析対象

保育士養成を行っているS女子大学の「乳児保育Ⅱ」の受講生44人（3年次生）を対象に助産師による特別講義を実施し、その評価として質問紙調査を行った。自尊感情尺度の測定では、再検査法による信頼性を検討するために、特別講義から6週間後に再度実施した。得られた回答のうち、いずれかの調査日に欠席した学生やデータに不備がある11名を除き、33名を分析対象とした。

### 2.2. 調査時期

事前調査：2018年5月2日

事後調査：2018年5月23日

最終調査：2018年7月18日

### 2.3. 調査内容

桜井（2000）が作成した自尊感情尺度を使用した（表1）。自尊感情尺度は10項目で構成されており、逆転項目が半数（5項目）含まれている。「自分の気持ちにもっともよく当てはまる数字を○で囲んでください。」と教示し、「はい」「どちらかといえばはい」「どちらかといえはいえ」「いいえ」の4件法で回答を求めた。得点化は「はい」が4点、「どちらかといえばはい」が3点、「どちらかといえはいえ」が2点「いいえ」が1点で、逆転項目についてはこの反対（例えば「はい」が1点）にした。

表1 自尊感情尺度の質問項目

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1. 私は自分に満足している。</li><li>2. 私は自分がだめな人間だと思う。(R)</li><li>3. 私は自分に見どころがあると思う。</li><li>4. 私はたいていの人がやれる程度には物事ができる。</li><li>5. 私には得意に思うことがない。(R)</li><li>6. 私は自分が役立たずだと感じる。(R)</li><li>7. 私は自分が少なくとも他人と同じくらいの価値のある人間だと思う。</li><li>8. もう少し自分を尊敬できたらと思う。(R)</li><li>9. 自分を失敗者だと思いがちである。(R)</li><li>10. 私は自分に対して前向きな態度をとっている。</li></ol> |
|---|

注）(R) は逆転項目であることを示す。

### 2.4. 分析方法

調査データの解析にあたっては、統計解析ソフトSPSSver22を使用した。まず、事前、事後、最終について一元配置分散分析を行い、その後Tukeyの多重比較の検定を行った。その際の有意水準は5%未満（ $p < .05$ ）とした。

特別講義のリフレクションシートについては、自由記述形式で回答を求め、KHCoder3. (Windows版)を用いてテキストマイニングによる計量分析を行った。KHCoderとは、樋口・川端によって開発された無償の解析ソフトウェアである。質的なテキストデータを数値データと同じように扱うため、恣意的となりえる作業を排除し、客観性を保持して全体的な傾向を捉えることができる。本研究では、対象の全記述データをChaSenによる形態素解析を行った上で、抽出された語の詳細な分析から保育学生の特別講義による学びや気づきについて検討した。

## 2.5. 倫理面への配慮

「乳児保育Ⅱ」の受講生に対して、研究内容と収集されたデータの取扱いについて説明し、調査対象者の承諾を得たうえで実施した。また、言語データの分析にあたっては、本文中、個人名が特定されないよう必要に応じて変更を加えた。

## 2.6. 外部講師による「いのちの授業」の概要

特別講義は、2018年5月9日の10時40分～12時10分に実施した。外部講師として、地域で周産期の母親の支援と産後ケア事業に従事されている助産師のOさんを招聘し、命の大切さや妊娠・出産・育児における女性の心と体の変化について学ぶ授業を行った。

本プログラムの流れは次の通りである。まず初めにお産の仕組みについて説明があった。学生一人ひとりに星の砂が配られ、それが実際の受精卵の大きさであると伝えられると、学生たちは驚きを示した。生命のはじまりがいかに小さくてはかないものかを実感しているようであった。その後、受精卵が新生児として誕生するまでの過程が語られた。母体の中でどのように成長していくのかを模型を用いながら段階的にみていき、子宮の変化や胎内での赤ちゃんの様子について具体的な解説がされた。また、出産は、母子ともに命がけであること、母親だけの力ではなく、赤ちゃん自身の頑張りも必要であることがエピソードを交えて紹介された。

次に、陣痛の特徴と産前産後のホルモンバランスの変化について教えていただいた。ホルモンの影響や環境の変化から鬱症状を発症しやすい母親のメンタルヘルスが主な内容であった。マタニティブルーと産後鬱の違いや妊産婦のメンタルヘルスの重要性を正しく理解することで、将来保育者としてどのように保護者支援をしていけば良いのかを考える機会となった。また、母子保健の分野で、妊娠から子育てまでの切れ目のない支援体制の構築が目指されていることにふれ、その機関として「子育て世代包括支援センター」の取り組みについて紹介があった。その中で、子育て世代を身近な地域で親身に支えるためには、各種関係機関の協力と連携が大事であることや、その役割の一端を保育者も担っていることが伝えられた。

最後に、学生による出産の疑似体験を行った(写真1)。赤ちゃん役の学生が周りの協力を得ながら子宮のトンネルから一生懸命出ようとする体験である。このことから、赤ちゃん自身の生命力やいのちの尊さを感じることができていた。誕生の瞬間は、大きな歓声や拍手が起こり、



写真1 いのちの授業における「出産体験」の様子

教室中が感動の一体感に包まれていた。そして、講義の締めくくりに講師のOさんから自分を大切にしながら保育者として頑張してほしいとのメッセージが述べられた。

### 3. 結果および考察

#### 3.1. 自尊感情尺度の測定

表2と表3は、プログラム前後の自尊感情尺度の得点結果である。1.「私は自分に満足している」( $F(2, 32)=3.52, p<.009$ )、3.「私は自分に見どころがあると思う」( $F(2, 32)=5.41, p<.001$ )、7.「私は自分が少なくとも他人と同じくらい価値のある人間だと思う」( $F(2, 32)=4.62, p<.016$ )の3項目は、事前調査よりも事後調査の得点の方が有意に上昇する傾向がみられた。特に、7.「私は自分が少なくとも他人と同じくらい価値のある人間だと思う」については、10項目のうちで最も高い得点であった。その他の項目については、有意差が認められなかった。

日本青少年研究所(2014)の報告によると、「私は他の人々に劣らず価値のある人間である」と「私は自分に満足している」の質問項目に対する回答として「とても満足」「まあ満足」と回答する割合が明らかに低いことが指摘されている。得点が低い傾向にある「私は自分が少なくとも他人と同じくらい価値のある人間だと思う」項目において、今回の結果では顕著に高い得点を示したことは注目すべき結果である。これは本プログラムの影響によるものと示唆される。

また、3.「私は自分に見どころがあると思う」では事前－事後、事前－最終で有意な差がみられた。同様に10.「私は自分に対して前向きな態度をとっている」でも事前－事後、事後－最終で有意な差がみられた。これらは、事前から事後で上昇した得点が、最終では下がっていた。このことから、その効果が一過性のものである可能性が高いことがわかった。

質問項目8.「もう少し自分を尊敬できたらと思う」は、その他の項目に比べて得点が低かった。これに関しては、先行研究(桜井, 2000)でも類似した傾向がみとめられた。よって、この項目はプログラ

表2 自尊感情尺度における平均値・標準偏差

		事前	事後	最終
1. 私は自分に満足している。	M	2.42	2.58	2.67
	SD	0.66	0.79	0.69
2. 私は自分がだめな人間だと思う。(R)	M	2.64	2.79	2.73
	SD	0.78	0.78	0.76
3. 私は自分に見どころがあると思う。	M	2.52	2.88	2.82
	SD	0.67	0.7	0.77
4. 私はたいいていの人がやれる程度には物事ができる。	M	3.09	3.24	3.12
	SD	0.63	0.5	0.55
5. 私には得意に思うことがない。(R)	M	2.76	2.82	2.88
	SD	0.75	0.68	0.86
6. 私は自分が役立たずだと感じる。(R)	M	2.91	3.03	2.94
	SD	0.72	0.73	0.66
7. 私は自分が少なくとも他人と同じくらいの価値のある人間だと思う。	M	2.94	3.24	3.24
	SD	0.7	0.66	0.56
8. もう少し自分を尊敬できたらと思う。(R)	M	1.61	1.55	1.67
	SD	0.66	0.62	0.78
9. 自分を失敗者だと思いがちである。(R)	M	2.82	2.97	2.76
	SD	0.88	0.88	0.83
10. 私は自分に対して前向きな態度をとっている。	M	2.76	3.09	2.79
	SD	0.71	0.68	0.78



表3 自尊感情尺度における分散分析後の多重比較

		有意確率	多重比較	自由度	F値
1. 私は自分に満足している。	事前－事後 事前－最終 事後－最終	0.134 0.009 ** 0.325	前<終	2	3.516 *
2. 私は自分がだめな人間だと思う。(R)	事前－事後 事前－最終 事後－最終	0.258 0.447 0.535	n.s	2	0.86
3. 私は自分に見どころがあると思う。	事前－事後 事前－最終 事後－最終	0.001 ** 0.023 * 0.645	前<終、前<後	2	5.406 **
4. 私はたいいていの人がやれる程度には物事ができる。	事前－事後 事前－最終 事後－最終	0.134 0.786 0.16	n.s	2	1.325
5. 私には得意に思うことがない。(R)	事前－事後 事前－最終 事後－最終	0.677 0.423 0.662	n.s	2	0.357
6. 私は自分が役立たずだと感じる。(R)	事前－事後 事前－最終 事後－最終	0.354 0.786 0.414	n.s	2	0.583
7. 私は自分が少なくとも他人と同じくらいの価値のある人間だと思う。	事前－事後 事前－最終 事後－最終	0.016 * 0.016 * 1	前<後、前<終	2	4.624 *
8. もう少し自分を尊敬できたと思う。(R)	事前－事後 事前－最終 事後－最終	0.488 0.601 0.16	n.s	2	0.795
9. 自分を失敗者だと思いがちである。(R)	事前－事後 事前－最終 事後－最終	0.201 0.701 0.09	n.s	2	1.359
10. 私は自分に対して、前向き態度をとっている	事前－事後 事前－最終 事後－最終	0.014 * 0.831 0.048 *	n.s	2	3.513 *

\*\*\*p&lt;.001 \*\*p&lt;.01 \*p&lt;.05

ムの影響に関係なく、日本人特有の文化や価値観が影響している項目であることが推察された。

以上のことから、本プログラムを実施したことで、学生の自尊感情がポジティブに変容したことが明らかになった。

### 3.2. 「いのちの授業」におけるリフレクションシートの分析

特別講義の感想について、学生の自由記述回答をテキスト化し、計量テキスト分析ソフトであるKHCorderを用いて分析した。その結果、総抽出語数は2913個、異なり語数は609個、文の数は236件、段落は39件であった。表4は、頻出語句の上位20を示す。出現回数が40回以上の抽出語をみると、「思う」

表4 受講生の回答から抽出された頻出語句（上位20）

抽出語	回数	抽出語	回数
思う	131	大切	35
お母さん	64	感じる	33
子ども	61	妊娠	30
生まれる	43	聞く	28
赤ちゃん	43	人	27
自分	42	子宮	22
保育	40	母親	21
知る	39	鬱	21
出産	39	分かる	20
大きい	38	今日	19

が最も多く出現し、「お母さん」「子ども」「生まれる」「赤ちゃん」と続いており、人物としては母親と子ども、出来事では子どもの誕生に係る言葉の出現が多いことがわかる。続いて、「自分」「保育」となっている。全体として「妊娠・出産時の母親と子どもについて学び、保育者としての自分について考える」授業であったことが表現されている。

次に、集計単位を「段落」とし、最小出現数10、共起関係上位60の条件で共起ネットワークを作成した。共起ネットワークとは、抽出語の出現パターンの似通ったものを線で結び共起関係を表している。強い共起関係ほど太い線で、出現数の多い語ほど大きな円で描画されている。

図1は、共起ネットワークの分析結果を示す。特別講義の学びについては、6つのカテゴリーに分類されることが確認できた。G1では、「思う」「お母さん」「子ども」を中心に共起しており、「自分」「大切」「思う」という語句と関連していた。その回答例として“出産は、お母さんも子どももしんどくて、でも頑張って生まれて。もっと自分を大切にしたいと思った”“保育士になると、子どものことや保護者のことを考えることが多いけど、自分自身のことをもっと大切にしたい”（下線は筆者）など、自他を大切に想う気持ちに関する回答がなされた。G2は、「大きい」「子宮」「驚く」といった語句と関連しており、“妊娠するとあんなに子宮が大きくなることに驚きました”“卵くらいの大きさだった子宮が、あんなに大きくなるのを見て、人間の体・女性の体って強くできているんだなと感じました”（下線は筆者）といった妊娠や出産の理解に関する回答がみられた。G3は、「出産」「人」と共起関係にあった。回答例は“お母さんが命がけで産んでくれて、尚且つ周りの人が愛情いっぱいに接してくれたからだと思うと感謝の気持ちでいっぱいです”（下線は筆者）といった親や周りの人への感謝に対する記述がみられた。G4は、「鬱」「産後」と共起しており、“妊娠鬱、産後鬱は誰にでもなりうることを知りました”（下線は筆者）といった母親のメンタルヘルスへの理解につながる回答があった。G5は、「改めて」「命」「力」の語句と関連していた。回答例は“改めて命を預かる職業だということを実感しました”“出産はお母さんの頑張りはもちろん、赤ちゃんの命の力もあることがわかりました”（下線は筆者）など、保育者としての使命感に関する回答がみられた。G6は、「今日」「授業」「受ける」と共起しており、“今日の授業を受けて今まで知らなかったこ

とをたくさん学びました”（下線は筆者）といった新たな学びに対する記述がみられた。これら6つのカテゴリーを学びの視点で再分類すると、①自分の価値や「いのち」を大切に想う感覚の醸成、②妊娠・出産・育児とメンタルヘルスに対する理解、③親や周りの人への感謝、④保育者としての使命感に分けることができた。このことから、本プログラムによる学びの視点が明らかになった。

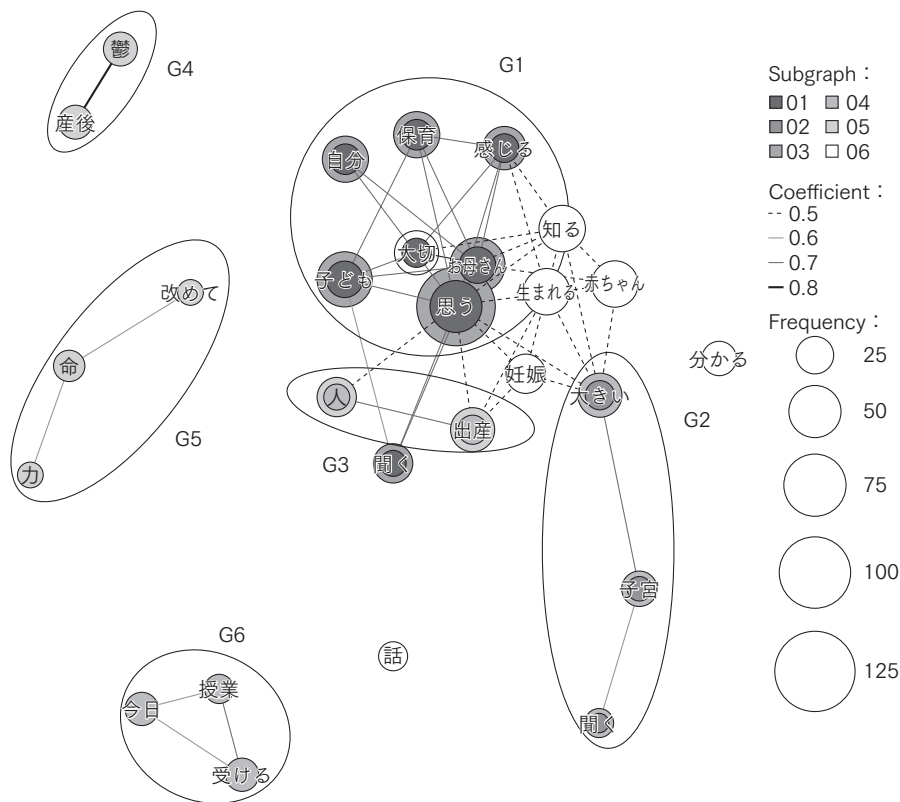


図1 受講後の感想における語句の共起ネットワーク

#### 4. 総合考察

今回、乳児保育の授業として、新たに保育学生の自尊感情を高めるための学習プログラムを提案し、実践からその効果を検証した。その結果、本プログラムによって学生の自尊感情は高まることが明らかになった。特に、7.「私は自分が少なくとも他人と同じくらい価値のある人間だと思う」については、先行研究で得点が低いことが指摘されているにもかかわらず（日本青少年研究所，2014）、今回の結果では、最も高い得点を示した。これは、本プログラムの効果が認められた結果といえる。

プログラムを通して、保育学生の自尊感情が高まった要因は、授業内容にあると思われる。助産師による「いのちの授業」では、妊娠や出産を母親からの視点だけでなく、赤ちゃんの視点からも学ぶことで、“自分も生まれてくる時に頑張ったんだな”、“自分ってすごいな”と自己投影させながら感じとっていたことが影響していると考えられる。また、自分が今ここに存在しているのは、たくさんの人が自分を大切にしてくれたからだと知ることによって“自分は周りの人から大切にされるだけの価値がある人間なんだ”、“もっと自分を大切にしよう”と思えたのではないだろうか。そして、妊娠・出産・育児によって女性の心と体に変化するしくみについて理解したことで、これまで漠然としていた妊娠・出産・育児に対する不安が解



消され、結果として、学生が女性として、あるいは保育者として妊娠や出産、子育てを前向きに捉えるきっかけとなったのではないかと推察する。

次に、受講後のリフレクションシートを分析した結果では、学生の感想から6つのカテゴリー【自他を大切に想う気持ち】【妊娠や出産の理解】【親や周りの人への感謝】【メンタルヘルスへの理解】【保育者としての使命感】【新たな学び】が生成された。それらに関連する内容で再分類すると、①自分の価値や「いのち」を大切に想う感覚の醸成、②妊娠・出産・育児とメンタルヘルスに対する理解、③親や周りの人への感謝、④保育者としての使命感の4つにまとめることができ、学生の本プログラムによる学びの視点が明らかになった。

今回提案した学習プログラムでは、妊娠や出産、育児のプロセスを周産期医療の分野から捉えたことは新たな試みである。そこに心理的なアプローチを加えたことで、学生がこれまで意識してこなかった自分が生まれたことへの自己理解や自分の存在価値を見出す自己肯定感、あるいは、出産時に自分も頑張ったと評価する自己効力感などが意識化されたと考えられる。その思考体験が、自尊感情をよりポジティブに変容させたのではないだろうか。

また、本プログラムの学びによって、自分が将来親になるイメージを持てたり、子ども理解や保護者理解が深化したことも考えられる。さらに、妊娠から出産、子育てと切れ目のない支援体制が構築されつつある現状を知ること、地域で子育てを支援する社会的な意義を理解し、将来的に自分も保育者として子どもの「いのち」を預かる立場になることを自覚したことだろう。このことが、保育者としての使命感や子育て支援に対する責務を実感する機会となったとも考えられる。

以上のことから、本プログラムによる学習効果としては、保育学生の自尊感情を高めることが明らかとなり、プログラムの目的を概ね達成した可能性が示唆された。さらに、学生の学びでは、「いのち」を大切に思う感覚の醸成、母親や子どもへの理解、保育者の使命感に繋がる学習ができており、本プログラムの副次的効果についても確認された。

今後の課題は、授業内容やカリキュラムの系統性や連続性を踏まえて、どの段階の学生にいつのタイミングで本プログラムを実施するのが最も効果的なのかについて検証することである。また、自尊感情について近藤（2007；2013）は、他者との比較によって成り立つ「社会性自尊感情」と、自分は自分でよいとする「基本的自尊感情」の2つがあり、それらをバランスよく育てることが重要であると説いている。「基本的自尊感情」は、「成功や優越とは無関係の感情であり、あるがままの自分を受け入れ、自分をかけがえのない存在として、丸ごとのまま認める感情である」と述べていることから、本プログラムでは、この「基本的自尊感情」に働きかける学習プログラムであったと言える。しかし、もう一方の「社会的自尊感情」への効果は確認できていない。先行研究によると、自尊感情は「情動的経験」と「自己省察」との関連が深いことが報告されている。そうであるなら、「情動的経験」として、妊産婦との交流会や新生児と学生が触れ合う機会を設定することで、さらに効果的な学習が可能になるのではないかと考える。他者との関係が伴う活動を取り入れるなど、プログラムの内容や学習方法について再検討し、より堅実なプログラムを模索していく必要がある。

## 引用・参考文献

厚生労働省（2017） 保育所保育指針

田中達也（2012）幼児期における保育者の役割 ―保育内容「健康」の実践―，佛教大学教育学部学会紀要（11），103-116，

牧野桂一（2012）保育現場における子育て相談と保護者支援のあり方，筑紫女学園大学・筑紫女学園大学

- 短期大学部紀要－(7), 179-191,
- 遠藤利彦 (2018)「アタッチメントが拓く生涯発達」, ミネルヴァ書房
- 遠藤利彦 (2016)「子どもの社会性発達と子育て・保育の役割 秋田喜代美 (監修) あらゆる学問は保育につながる－発達保育実践政策学の挑戦」 東京大学出版会
- 遠藤利彦 (2017)「赤ちゃんの発達とアタッチメント 乳児保育で大切にしたいこと」 ひとなる書房
- 遠藤利彦 (2018)「発達153 最新・アタッチメントからみる発達 養育・保育・臨床の場における“愛着”をめぐって」 ミネルヴァ書房 pp.2～9
- Verschuieren, K., & Marcoen, A. (1999)「Representation of self and socioemotional competence in kindergartners : Differential and combined effects of attachment to mother and to father.」 Child Development, 70 (1), 183-201
- 勝浦美和 (2014) 自尊感情を育む保育における留意点及び指標, 四国大学紀要, (43), 1-11
- 勝浦美和 (2014) 保護者と保育者がもつ自尊感情が高い子どもイメージ：「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との比較を通して, 応用教育心理学研究 36 (1), 3-16,
- 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領
- 近藤卓 (2010) 自尊感情と共有体験の心理学－理論・測定・実践初版, 金子書房
- 近藤卓 (2007) 生きる力を支える自尊感情, 児童心理 7 月号
- 近藤卓 (2013) 子どもの自尊感情をどうそだてるか そばセット (SOBA-SET) で自尊感情を測る, ほんの森出版
- 園田雅代 (2007) 今の子どもたちは自分に誇りをもっているか, 児童心理 7 月号
- 桜井茂男 (2000) ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討, 筑波大学発達臨床心理学研究 (12), 65-71
- 高坂康雅 (2012) 大学生における共同体感覚と社会的行動との関連, 和光大学現代人間学部紀要－(5),
- 戸江茂博・久保木亮子・佐藤智恵 (2017) 保育専攻学生は「保育」をどう理解しているのか, 神戸親和女子大学児童教育学研究 (36), 97-108
- 樋口耕一 (2014) 社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して, ナカニシヤ出版
- 古山典子・瀧川淳 (2017) 質問紙調査に見る教師の音楽指導観－自由記述回答の計量テキスト分析を通して－, 福山市立大学教育学部研究紀要, 6, 19-29
- 鳥丸佐知子 (2016) 保育士養成関連授業は学生の何を変えたのか－「乳児」「幼児」イメージを中心に－ 京都文教短期大学研究紀要, 55, 39-48
- 金山健一 (2014) 要支援学生対象のピア・サポート研修プログラム開発のための基礎的研究, ピア・サポート研究, 11, 1-10.
- 日本青少年研究所 (2014) 国際比較からみた日本の高校生 80年代からの変遷, 一ツ橋文芸教育振興会
- 山口香織 (2019) 保育者養成課程における乳児保育のシラバス構築に向けた一考察－保育所保育指針の改定内容を中心に－, 神戸親和女子大学児童教育学研究 (38), 313-322